

発行


 国土交通省中部地方整備局  
 清水港湾事務所  
 御前崎事務所/下田事務所/田子の浦港事務所  
 静岡市清水区日の出町7番2号  
 TEL. 054-352-4146(代表)  
<http://www.shimizu.pa.cbr.mlit.go.jp>

# みなとしみず

～CONTENTS～

- 祝 田子の浦開港50周年 • 新たな物流拠点へ RORO 船新規就航 • 親子で体験！波消しブロックの製作【興津フェア】
- 「世界津波の日」 避難訓練を実施 • 御前崎港の利用促進を図るセミナーが開催 • シリーズ「モノから見える清水港」④(全5回)



お知らせ

- 水中写真家 トニー・ウーが見た海の世界 写真展が開催されます。(2017年1/12～1/24 開催 ま・あ・る4階ギャラリースペース) <http://www.sensui.or.jp/event>  
 共催：一般財団法人日本潜水協会 静岡市こどもクリエイティブタウンま・あ・る 協力：国土交通省 中部地方整備局 清水港湾事務所/海のみらい静岡友の会

## 祝 田子の浦港開港50周年

1966年(昭和41年)に関税法による開港指定で国際貿易港となった田子の浦港は、今年で50周年を迎えました。11月10日(木)から14日(月)まで、開港50周年を祝う記念行事が行われ、オープニングの10日(木)には田子の浦港の発展に貢献した個人・団体の記念表彰などとともに「太平洋の白鳥」と呼ばれる練習帆船「日本丸」が初寄港し、ひととき美しい華を添えました。

12日(土)には、「日本丸」の実習生による帆を張る訓練「セイルドリル」が披露され、多くの来場者から拍手が沸き起こりました。13日(日)は、田子の浦港ポートフェスタとともに「日本丸」の一般公開が行われ、約7千人もの方が船内見学を楽しみました。

当事務所も「港紹介コーナー」ブースを13日(日)に出展し、田子の浦港の整備状況や3.11東日本大震災に関するパネル展示、さらに港湾施設の役割や重要性を理解していただくために、防波堤の模型を使った波の低減効果を体感する実験を行い、子供を含む多くの方が興味津々に実験し、「防波堤の効果がとても分かりやすい」などの感想を頂きました。

「田子の浦港ポートフェスタ」は、富士市主催のイベントで地域に貢献する田子の浦港の役割を分かりやすく紹介し、港への関心を高めるとともに、ベイエリアの地域振興を図る目的で開催されています。会場では「しらすの鉄人\*」によるしらす料理や地域のB級グルメ「富士宮やきそば」などのブースが出展され、たくさんの方が田子の浦港地域の特産を味わいました。また港湾荷役の展示や税関のキャラクター「カスタム君」、海上保安庁のキャラクター「うみまる」君も登場し、期間中の来場者数は約2万人にのぼり、田子の浦港開港50周年を大いに盛り上げました。



《帆船「日本丸」と富士山》



《津波模型実験体験の様子》



《セイルドリルの様子》

\*しらすの鉄人とは、地元の田子の浦港で水揚げされるシラスの新たな食べ方を発信するイベント。

# 新たな物流拠点へ RORO船新規就航

10月3日(月)、川崎近海汽船(株)により清水港と大分港を結ぶ貨物専用フェリー「RORO船※」の新規定期航路が就航しました。

新航路は、「北王丸」(総トン数11,492トン、全長173.10m)が、清水港と大分港間を20時間で結び、週3便(清水港には、月・水・金)の運航をしています。

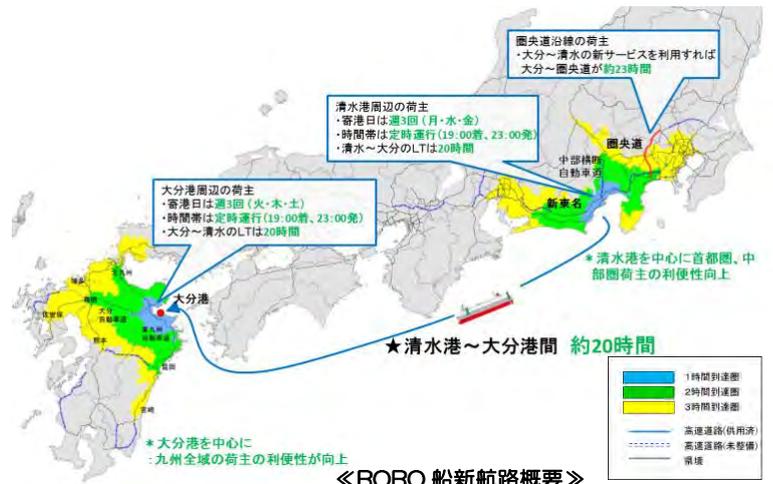
2017年度には、更なる利便性の向上と物流機能強化を目的にデイリー(毎日)運航が検討されています。

新航路の就航により、清水港が九州と関東・甲信地区を結ぶ玄関港となることで、輸送効率が向上し、また、物流のモーダルシフト(トラック輸送から海運輸送への変換)により長距離ドライバー不足の問題解消にも貢献することから、国内物流の安定化に寄与することが期待されています。

※RORO船とは、「ロールオン・ロールオフ船」の略で、トレーラーやトラックがそのまま船内外へ自走できる「貨物専用フェリー」のことを言う。RORO船は、港から港へトレーラーの荷台ごと大量の貨物を運べるため、効率良く運ぶことが出来る。



《RORO船「北王丸」》  
(写真提供：静岡県)



# 親子で体験！波消しブロックの製作【興津フェア】

10月23日(日)、興津国際流通センターにおいて「第16回清水港興津フェア」が開催されました。

このフェアは、「清水港の活性化、貿易の振興及び港湾に対する理解と新たな交流の場としての賑わいの創出」を目的とし毎年開催されています。地元で採れた野菜などの販売、韓国の屋台グルメ・キムチ漬け体験等が行われ多くの人々が来場し賑わいました。

当事務所も港の機能や役割を知っていただくために、ブースを出展し、清水港の経済効果、東日本大震災関連などのパネル展示や広報誌等の配布を行いました。

また、今回は小学生(親子)を対象に“ミニチュア波消しブロックの製作体験会”を同時に開催し、24組の親子連れが波消しブロックの機能や使われる場所などの基礎知識を学びながら、製作体験をしました。子ども達は、楽しそうにブロックの型へ石こうを流し込み、本物同様の製作工程を学びました。

加えて、港を波浪から守る防波堤と波消しブロックの効果を実験する模型でその効果を体感するなど、港の機能や港湾構造物である防波堤、波消しブロックの役割を楽しく理解する良いイベントとなりました。



《防波堤の効果実験の様子》



《石こうを波消しブロックの型に流し込む様子》

## 「世界津波の日」 避難訓練を実施

11月5日（土）の「世界津波の日※」及び「駒越宿舎屋上避難階段完成」にあわせ、宿舎屋上での衛星通信機器による映像配信訓練及び町内の方々と共に津波避難訓練を実施しました。

訓練当日は、天候にも恵まれ、息を切らしながら屋上へ避難してきた町内の約40名の方は、その眺望に感嘆の声を上げるとともに、あらためて5階建の高さを実感されておりました。

参加者からは、「実際に地震が起こった時に、間に合うか不安」「この建物は、意外と高いですね」などの感想を頂きました。当日は、たくさんの町内の方々に来ていただき、防災意識の高さを感じました。

※「世界津波の日」 1854年旧暦11月5日の安政南海地震の際、稲むらに火をつけ、村人を高台に導き大津波から多くの人々の命を救った逸話「稲むらの火」にちなみ、その日を「津波防災の日」と定めている日本が中心となり、津波の脅威と対策への国際的な意識の向上を目的に「世界津波の日」を提案し、昨年12月の国連総会で採択されました。



《完成した駒越宿舎屋上避難階段》



《屋上避難階段を上る町内の方々》



《世界津波の日や屋上避難階段の説明》

## 御前崎港の利用促進を図るセミナーが開催

御前崎港の活用状況、利便性を県内外の荷主企業等関係者に伝え、国際物流拠点である御前崎港の利用促進を図ることを目的とした「御前崎港セミナー」が10月12日（水）浜松市内において開催されました。御前崎港を管理する静岡県をはじめ御前崎市、牧之原市等で構成される「御前崎港ポートセールス実行委員会」が主催し、関係者約200名が出席されました。

御前崎港は、静岡県中・西部地域の国際物流拠点港として、完成自動車及び自動車部品の輸出、内航船によるフィーダー輸送等により発展を遂げました。現在は、スズキ（株）相良工場における主力輸出車の増産計画などにより、既に今年の夏から大型自動車運搬船（230m級）が投入されるなど、貨物量の増加が期待されています。また、今年9月には韓国・中国・フィリピン航路が1便開設されるなど、活気を取り戻しつつあります。

セミナーでは、静岡経済研究所の大石<sup>おおいし</sup>人士<sup>ひと</sup>常務理事が「フロンティアへの挑戦」をテーマに静岡県経済の特徴、経済を取り巻く環境変化等を紹介され、「駿河湾港」の玄関口である御前崎港の優位性、今後への期待を分かりやすく解説していただきました。

御前崎港においては、インバウンド観光を推進し、さらに地元経済への波及効果拡大を図るため、今年9月に「御前崎港客船誘致協議会」が設立され、クルーズ振興の推進を図り、港湾地域における観光産業の振興、経済活動の活性化への役割が期待されています。

本セミナーが今後も継続的に開催され、御前崎港の優位性を幅広くPRし、荷主企業の増加により、御前崎港がさらに繁栄されることを願っております。



《主催者挨拶（柳澤重夫市長）》



《講演（大石人士 静岡経済研究所常務理事）》  
(写真提供：御前崎市)

# シリーズ「モノから見える清水港」④(全5回)

## 『蒔絵のお椀』

フェルケール博物館の常設展示室のなかでも、目を引く展示資料に金蒔絵のお椀があります。正式に名称をつければ「舟曳図金平蒔絵椀（ふなひきずきんひらまきえわん）」と呼ぶことになるでしょうか。

椀の口部分を指で挟み、底部に向けて指を滑らせると、底の部分が最も厚くなっています。ろくろを使い、木材を回転させながらノミで削って椀形にしたのがわかります。このように作られた器を挽き物と呼びます。お椀はとても軽く、櫟材ではないかと思えます。お椀には黒漆が何度も塗られ、下地としています。下地の上には金で絵が描かれています。これは、漆で文様を描き、金粉を蒔いた後に文様の部分だけに漆を施し、研磨する“平蒔絵”の技術を使用した高級品です。それでは、お椀に描かれた絵を覗いていきましょう。

笠をかぶり、蓑を付けた3人が綱を引いています。しかし、綱は蓋の右外へと延びているため、その先はわかりません。ところが、蓋を開けて裏返すと、今度は左から綱が延びて右に見える小舟の舳先に結び付けられています。全体をとおして考えると「3人の人が小舟を曳いている図」といえるでしょう。さて、これは何を描いているのでしょうか???

以前に記したように江戸時代の清水湊は巴川岸に築かれた川港でした。湊は巴川河口をやや遡った右岸にあり、現在の清水区本町付近が中心でした。その一方で、対岸は向島と呼ばれる未開発地でした。現在の港湾事務所のある日の出地区を含め、ドリームプラザやフェルケール博物館のある地域になります。未開発地といいましたが、当時、向島は砂浜となっており、わずかに設置されていたのは“甲州廻米置場”で、現在の港橋北側にあたります。さつき通りを挟み、「なすび」や「島崎タクシーの待機所」周辺の約620坪(2,060㎡)が甲州廻米置場に相当します。ちなみに、この周辺は現在でも山梨県の県有地となっています。

話は江戸時代初期に遡ります。当時、朱印船貿易や高瀬川の開削を行った京都の豪商・角倉了以は、慶長12年(1607)に徳川家康の命令により、富士川を開削して舟の通航を可能にしました。これを受けて、甲斐国の幕府領の年貢米が富士川を下り、河口部の岩渚や蒲原を経て清水の甲州廻米置場へと蔵入りされました。一方では、清水湊から塩をはじめとした生活物資が蒲原、岩渚を経て富士川を遡り、甲斐国へと運ばれて行きました。この時、岩渚からは高瀬舟で71km上流の鰍沢まで4~5日かけて、綱を引いて荷を積み込んだ舟を川上げしたと伝えられます。舟曳図金平蒔絵椀は富士川を遡る高瀬舟の舟曳図を描いているのでしょうか。この椀は江戸時代の清水湊で廻船問屋を営んでいた「三保屋」で実際に使われていたものです。当時の廻船問屋は湊に着く船の船主と荷物の買取りの交渉をしましたが、その交渉がまとまるまで船主は廻船問屋に寝泊まりしていたといえます。つまり、廻船問屋は高級旅館の役目も果たしていました。金蒔絵の高級な椀が伝わっていた理由も納得できます。また、「富士川の舟曳図」も清水湊に滞在する船主への“おもてなし”のひとつだったのでしょう。廻船問屋のお椀は展示では5客を紹介していますが、実際には10客が1セットとなり、木箱に大切に納められていました。



蓋表

蓋裏

※ このシリーズは「モノから見える清水港」について寄稿によるもので、今回は連載4回目です。

橋原 靖弘（ちんばらやすひろ） 1,962年 藤枝市生まれ。フェルケール博物館 学芸部長

## 海とみなとの相談窓口



全国共通フリーダイヤル

おーいに よくなれみなと

0120-497-370

受付時間: 9時30分~12時、13時~17時(土・日、祝祭日は除く)

☆携帯電話・PHSからもご利用できます☆

- ・海やみなとの利用に関すること
- ・総合的な学習時間に関すること
- ・みなとの構想や計画に関すること
- ・海洋土木技術に関すること
- ・みなとの防災に関すること

その他、海とみなとに関することは何でもお問い合わせください

## ■本紙に関するお問い合わせ先■

清水港湾事務所 企画調整課

堀池・西村Tel. 054-352-4148

ご意見ご感想をお寄せ下さい。



pa.cbr-shimizukouwan@mlit.go.jp